本高弓ノ木遺跡　５区　現地公開資料

－弥生時代前期の水路に貯木された大量の丸太材－

平成２２年１２月２５日
財団法人鳥取県教育文化財団

Ⅰ　経　過

財団法人鳥取県教育文化財団では平成 21 年 5 月から一般国道 9 号（鳥取西道路）道路改築工事に伴う発掘調査を鳥取市本高地内に所在する本高弓ノ木遺跡で実施しています。

本高弓ノ木遺跡では、これまでにも２度の現地説明会を開催し、古墳時代前期(４世紀頃)の池や水路に伴う木製構造物、弥生時代後期(２世紀頃)の盛土遺構等に関する調査成果を報告してきました。

その後、さらに下層の調査を行ってきたところ、①弥生時代前期の水路に貯木された大量の丸太材や②因幡地域で最も古い特徴をもつ弥生土器を新たに確認しましたので、その調査成果を発表します。

調査期間　平成 21 年 5 月～平成 23 年 1 月中旬（現地調査終了予定）
調査面積　4,880 ㎡
調査組織　財団法人鳥取県教育文化財団 調査室 美和調査事務所
調査担当　調査第 1 担当　濵田竜彦 下江健太 山梨千晶 中尾智行

Ⅱ　本高弓ノ木遺跡の概要と調査成果

（１）本高弓ノ木遺跡の概要

本高弓ノ木遺跡では弥生時代や古墳時代における因幡地域の歴史を考察する上で貴重な遺構や遺物が確認されています。

時代	主な遺構・遺物	関連する遺跡や事項
古墳時代前期 （約 1700～1600 年前）	木製構造物を伴う池や水路 最古級の土嚢積み	本高 14 号墳(山陰最古の前方後円墳) 古墳時代開始期の水利・土地開発
弥生時代後期 （約 2000～1700 年前）	貼石を伴う盛土遺構 等	低地に築造された墳丘墓の可能性有
弥生時代中期 （約 2200～2000 年前）	水路や居住域	弥生時代の水利・土地開発
弥生時代前期～ （約 2500～2200 年前）	加工した丸太材を大量に貯木した河川 因幡最古の弥生土器	弥生時代開始期における木材利用 因幡における縄文から弥生への移行

（２）弥生時代前期に貯木された丸太材について

①概要

水路内に貯木された大量の丸太材がみつかりました。丸太材は、枝が打たれ、樹皮が剥がされています。表面には、石斧によると思われる加工の痕跡があり、根が残存しているものもないことから、自然の倒木ではなく、人が伐採し、加工を加えたものであることが分かります。

また、丸太材を埋める砂の中に弥生時代前期の土器が含まれていることから、この水路は弥生時代前期に貯木のために利用されていたと考えられます。

弥生時代における丸太材の集積は、これまでに、大阪府東大阪市の西ノ辻遺跡で弥生時代後期初頭(約 2000 年前)のものが確認されていましたが、本高弓ノ木遺跡の水路に貯木されていた丸太材は弥生時代前期にさかのぼるもので、弥生時代の最古の事例として、弥生時代開始期における木材利用のあり方(木材加工の工程)を示す極めて貴重な発見です。

②丸太材が貯木されていた水路

○調査区内を西から南に蛇行しています。幅は約 20m の水路。深さは 1m 以上。

＊まだ、調査中のため最深部の深さは未確認です。

○居住域(調査区の北西側に推定)の南東側を流れていたと想定しています。

③丸太材の特徴

○最も多いのは径 20 ㎝前後。長さ 11m、直径 80～100 ㎝にもおよぶ大木も含む。

○今日現在、200 本程度を確認。

＊まだ、調査中のため、今後も増加する可能性があります。

○３本の大径木について樹種の同定実施(鳥取大学地域学部　中原計　准教授)。結果は１本がケヤキ、２本がムクロジ。

＊その他の樹種同定は、現地調査終了後に実施予定。

ケ ヤ キ　落葉大高木。保存性が高く、弥生時代には容器などよく用いられています。

ムクロジ　落葉高木。軽軟な材。弥生時代には杭材などに用いられることがあります。

○水路内からは枝や樹皮はほとんど出土していません。伐採後、山中で不要な枝や樹皮を取り除いた丸太材が貯木されていると考えられます。

④斧の柄の原材とみられる木材が出土

○丸太材に混じって、石斧の柄にするために持ち込まれたと推測される原材が出土しました。

○集落内で生産された石斧を使用して、伐採、枝打ち、樹皮の剥ぎとりが行われていたのかもしれません。

（３）因幡最古の特徴をもつ弥生土器について

① 概要

貯木に使用されていた水路から、縄文晩期末の特徴をもつ縄文土器の深い鉢と共に、これまで因幡地域では見つかっていなかった弥生時代前期初頭の特徴をもつ弥生土器の壺が出土しました。

②出土した土器の特徴

○出土したのは壺形土器の口縁部片です。口縁部が短く、僅かに外に反る特徴から、これまで因幡地域では確認されていなかった弥生時代前期初頭の土器(最も古い弥生土器)と考えられます。

Ⅲ　まとめ

（１）水路内に貯木された大量の丸太材

「弥生時代開始期における木材利用（木材加工の工程）を考えるうえで貴重な資料」

○弥生時代の開始期に大量の木材が貯木されていた

弥生時代の初めに建築部材や木工品などに加工するための木材の需要がたいへん高かったことが分かります。

○弥生時代の前期に伐採後、枝打ちし、樹皮を剥いだ丸太を水中に貯木していた

木材を水中に貯木することは今も行われています。これは、木材を水に漬けると、虫がつきにくく、腐りにくくなり、色も良くなるからだといわれています。

また、水漬けにせずに乾かすと割れたり、反りが出てしまう木材も、数年間水に漬けることにより、そうした変形を防ぐことができるようです。

○ケヤキなどの広葉樹が貯木されていた

ケヤキは容器や建築部材にもよく使用される材です。鳥取市青谷町にある青谷上寺知遺跡からはケヤキで作られた弥生時代の高杯などが出土しています。ケヤキの大径木は、芯の部分を取り去り、小さく分割して、容器などの材料としたのではないかと推測されます。また、直径 20 ㎝程度の丸太材には建築部材として使用できそうなものもあります。弥生時代前期の人々は、あらかじめ「何を作るか」、「何に使うのか」を決めたうえで、木の種類や大きさを選択して伐採し、貯木していたことが伺えます。

（２）因幡最古の特徴をもつ弥生土器

「因幡地域における縄文時代から弥生時代への移行を考える上で貴重な資料」

○縄文時代晩期末の特徴をもつ深鉢と出土

縄文時代晩期末の特徴をもつ縄文土器と共に出土していることから、鳥取平野に暮らしていた人々の生活や社会が、縄文時代から弥生時代にどのように移り変わっていたのかを考える手がかりを得ることができました。

大量の木材が横たわる水路

水路内から出土した大量の丸太材

最も大きな丸太材（ケヤキ材）

最も大きな丸太材に残る加工痕（ケヤキ材）

水路内から出土した斧の柄の原材とみられる木材（長さ約120㎝、約直径４㎝）

弥生時代前期初頭の特徴をもつ弥生土器
（壺の破片）

縄文時代晩期末の特徴をもつ縄文土器
（深い鉢の破片）